なかま

青森県立大湊高等学校　東京同窓会

第33号

平成25年度

2013年6月29日発行

地球はせまくなってきた

会長　斎藤忠志（第9期）

青森と東京が新幹線で三時間でつながる。我々の若い頃は夜行列車を利用してほぼ一昼夜の旅が普通だった。仙台ですら大湊を最終便で発ち、翌朝に到着という状況だった。列車の速度が時間距離を短くしてくれたことになる。

同様にあるいはそれ以上に、便利になったのが情報化の進歩である。情報化はその広がりとスピードアップが著しい。

最近は電車の中では、若い人の多くがケータイやスマホなどでEメールやインターネットあるいはフェイスブックやラインなどのSNS（社会的ネットワーク）、ゲーム、音楽、読書、さらに通販に励んだりしている。都会では中学生になるとケータイかスマホ所持を許す学校が多いそうだ。子供の安全のためには親と常に情報交換ができるようにしておく必要があるということだ。社会環境が物騒になったということでもあろう。

今年の二月と四月にそれぞれ二週間ずつハワイに行った。七割くらいは仕事で残り三割は遊び、というかゴルフや観光を楽しんだ。

数年前までは、外国に行くと日本のニュースを知るのにかなり苦労した。ニューヨークなどではホテルで日遅れの新聞を高い値段で購入することもできたが、遅れた情報を高いお金を払って買うのは躊躇した。そこで例えば五番街にあった日本航空の事務所まで行き新聞を見せてもらうなどをした。

ところが今回はネット利用でもはや国内にいるのと同じように日本の情報をリアルタイムで知ることができた。東奥日報のウェブサイトのお悔やみ欄をみて、あのばあさんが亡くなったか、九十八歳だったのかなどと感傷に浸ったりした。ネットの便利さをつくづく感じた。

国際電話は今でも結構高額だが、メールは無料のようなものだ。時差はあるがどちらかが辛抱すればチャットもでき、電話以上の情報交換ができる。

一方で怖いことも生じる。交通や通信はつながったシステムである。どこかで故障が発生した場合、全体が機能しなくなるケースが多い。今回の旅行でもメールで明日連絡すると送信したが、どうしたわけか翌日はパソコンの送信機能が故障した。相手にはこの故障状態が伝わらないので慌てた。いろいろといじっているうちに何とか回復し、ほぼ半日遅れで連絡が取れ、ことなきを得た。

情報化は今後さらに大きく進展することが予想されている。すでに東京と下北・むつは指呼の間にあるといえる。東京には各種のインフラがある。むつには素晴らしい自然がある。むつに住んで東京でビジネスを行うといった時代が来るかもしれない。それぞれの特徴を活かすことによって何かができるのではないだろうか。

ともかく少なくとも交通や情報は画期的に技術進歩を遂げ、地球が狭くなったことを感じさせる。以前は会議のために一泊していたのが日帰りになり忙しくなった、という面もある。

これまでの人生八十年は、現在では百年にも、あるいはそれ以上にも相当するといえるかもしれない。

近況について

校長　佐藤桂一

今年の春は肌寒い日が続き、校地内の桜は満開しませんでしたが、学校スローガン（昨年度から作り始めた）を募集したところ、「百花繚乱～新たな青春を咲かす～」が選ばれました。桜が満開しなかった分、生徒たちは学校スローガンを胸に、自分の目標達成に向けて、自分だけにしか咲かせない思い思いの花を精一杯、年度末には校地内に咲かせてくれることでしょう。また、現在、生徒会執行部で「ゆるキャラ」も募集しており、完成しましたら学校のホームページでも紹介しますのでお楽しみにしてください。

学校の近況について簡単にお知らせします。今春の卒業生の進路状況は、国公立大学合格者数が十四名（過去最高）と生徒及び先生方が粘り強く頑張ってくれました。合格校には全員進学し、合格者全員が部活動に加入していました。もちろん他の生徒たちも、進学・就職・資格取得面で本当によく頑張ってくれました。

今年度の高校総体は、「限界を超えろ、我らの闘志、我らの挑戦」のスローガンのもと始まり、戦績は陸上部が女子400Mリレーで初優勝、男子では棒高跳びと400Mハードルで第一位（いずれも二年生）、これ以外にも入賞者が多数出ました。また、女子ヨット部が十五年連続優勝（通算三十二回優勝）で表彰されました。硬式野球部は県春季大会で青森山田高校に敗れはしたものの、夏の甲子園大会出場を目指し練習に汗を流しています。一方、文化部では、本校の吹奏楽部が、六月七日に下北文化会館で行われる「県高P連むつ大会（県内全域から約六〇〇名の高校関係者が参加）」で、むつ下北地区の代表校としてすばらしい演奏を披露してくれました。

今年度は、本校の近況をこれまで以上に、タイムリーにホームページに掲載して参ります。多くの情報が詰まっていますので、是非ご覧ください。また、本校のホームページが会員相互の情報交換やネットワークづくりにお役立ていただければと思います。

私ども教職員一同、大湊高校生一人ひとりが粘り強く頑張れるよう全力で取り組んで参りますので、今後ともご支援とご協力の程、よろしくお願いいたします。

管見拙語

県名を見れば、明治維新の際、官軍側か反官軍だったかが概ねわかる。廃藩置県に続く群小県の合県で官軍側だった藩は、鹿児島県（薩摩藩は俗称で正式名称は鹿児島藩）や山口県（幕末には周防山口藩）のように、藩名がそのまま県名になっているし、反官軍だった藩は山や川あるいは郡名が県名になっている。青森県はというと、錦旗を担いだということで当初弘前藩の名が県名になったのだが（三週間後には県庁移転で青森県に改名）、その中身は津軽から見れば仇敵南部の八戸、七戸、斗南、海を渡った館（松前藩）までも含む無謀なものだった。これを画策したのが斗南藩少参事・広沢安任と八戸藩大参事・大田広城。食うや食わずの斗南藩まで抱き合わせの貧乏な南部だけの合県では食い詰める、金持ちの弘前藩と合県すべきと、京都守護職時代から親交のあった新政府の要人、大久保利通、木戸孝允を訪ねた。広沢・太田の建言によって、稲穂もたわわな津軽平野とヤマセ吹き荒ぶ南部荒地の合併という信じ難い青森県の原型が出来、明治四年九月四日発令された。それから百四十余年、決して裕福とは言えない青森県だが、型どおり、弘前藩・黒石藩で一県、斗南藩・八戸藩・七戸藩で一県となっていたとしたら、南部の県は…。斗南藩・八戸藩合作の建言に寄る所大なこの陸奥国・明治の驚愕合併を、この地を故郷とする大半の大高同窓会のメンバーはどう評価しているのだろうか。

（Y・T）

恩師健在

回想

奈良正義

青森県人でありながら大学卒業まで下北半島へ足をのばしたことがなかった者が、東通村にある高校の分校へ勤務せよとのこと、昭和三十四年の春であった。当時はまだTVが一般家庭に普及していなかったし、交通機関も国鉄やバスの時代、自家用車など普及していなかった。

大湊高校への勤務は、昭和四十一年から四十九年までの八年間で、むつ市内の高校人事交流の第一号だった。自宅の田名部から国鉄で海老川駅から大湊駅、そこからバスで宇田まで乗りついで通勤した。自家用車に乗れたのは、昭和四十五年で、冬の雪道は、新町三叉路から宇田までの緩い上り坂は一時停止するとスリップし、よく車を押してもらい難儀だった。

担任をした学級の教室は、旧海軍通信隊の古い木造の庁舎の一番奥だった。前任校とは校風も違っており、向学心旺盛、目の輝きは明るく、何事にも積極的で、素直な良い生徒達であった。丁度二単位の地学必修が始まった頃で、地学同好会がすぐでき、放課後や休日はよく山へ出かけたり、天体観測などに興味のある生徒もおり、楽しかったことだけが思い出される。

新学期初めの行事は、新入生歓迎会、新任教師も歓迎された。体育祭は五月第三日曜日で、雨降らずのジンクスは私の在職中も続いた。

学校行事はなんといっても耐久遠足である。昭和四十一年に赴任された奈良岡良二校長は、オリンピック競歩選手で「健全なる精神は健全なる身体に宿る」というローマの詩人ユベナリスの言葉を引用した「精神的健康は健康な身体をつくること」の教育方針の下に実施された。一年目は全校急歩大会と称し、男子はマラソン、女子は急歩で新町三叉路までの往復。二年目は耐久遠足になり、男子は川内町宿野部小学校往復の五十キロ、女子は川内小学校往復三十五キロ、交通事情を考慮して夜十一時出発、夜通し歩いて翌日午前中に学校着。深夜に歩かせるということでいろいろ問題もあった。これらを修正し、三年目は下北の豊かな自然のなかを歩くコースになった。コースは体育科・生徒指導部を中心に、むつ山岳会の指導や助言を得て安全を第一に考え設定した。男子四十三キロ、女子三十二キロのコースづくりがなつかしく思い出される。学校の伝統行事となったこと、生徒も卒業後の大高生の絆を深める思い出となっていることであろう。

昭和四十四年、勤務三年目、まだ若干三十三歳。担任生徒の卒業を楽しみにしていた学級担任から、生徒指導部長へと配置換えになった。この頃は、全国的に学園紛争が多くあり、県内でも高校生の政治活動を規制する通達が出された程であった。本校でも、生徒会を中心に校則の撤廃や見直しを求める活動が盛んで、中でも「長髪を許可して欲しい」とか「制帽着脱の自由を認めろ」とかの強い要望が出され、生徒総会での議論が少なくなかった。確かに開校当時のまゝの諸規程では時代の変化に対応できないものもあり、見直しは必要であった。生徒会に風紀委員会をつくり大高生としての自覚と誇り、そして地域社会からも親しまれ支持されること等も議論する一方、毎日新聞連載の「教育の森」などで若い先生方と学習会をもったり大いに議論した。特に最後までもめた長髪・制帽の着脱の自由に付いては生徒会に頭髪委員会を作って考える一方、私達生徒指導部も市内の理容師さんへ出向き高校生としての清潔感のある髪型の指導・助言をしていただいた。このようにして原案をつくり、着帽を条件に長髪を許可する方向で職員会議の了解をとった。当時の生徒指導部の伊藤公正先生や牧野正藏先生に大いに助けられ校内規程の改正という大きな時代の流れを生徒と大きく対立することなくおさめることができたことは幸いであった。その当時から四十余年経過し、当時の生徒も還暦を迎えている。私は下北で五十五回目の春を迎えている。

もうかなり歳をとったと思っているが、昨年大湊水源地の古木から学ぶことがあった。水源地の桜は、旧校舎時代の生徒には憩いの場所である。そこの桜を縁あって十九期卒業の瀬川威さん夫妻、祐川省治さん夫妻と五人で調査することができた(この調査結果は「むつ市文化財調査報告書　第四十号」掲載)。水源地の桜はソメイヨシノで、寿命は六十年余りといわれているが、百年以上も花を咲かせている。その長寿の原因に「修復再生幹の形成」とか「萌芽更新」といった桜の生きる為の戦略ともいうべき現象がみられる。帰郷の際には水源地や宇田児童公園のソメイヨシノを是非見て欲しいと思う。下北の自然にはまだまだ学ぶことが多い。

これらのことが五十五回の下北の春を毎回新しい気持ちで迎えさせてくれたのである。

近況雑感

わが懐旧の『マクベス』

顧問　佐々木 彦藏(第7期)

六十五歳の時、JR「大人の休日」会員になって以来、運賃三割引きの恩恵に浴している。

古希を過ぎて仕事から離れヒマが出来たので毎月大湊へ帰る。

平成九年に運動公園の近くに建てた苫屋があるので、宿の心配はいらない。八月はほぼ一カ月、五月のゴールデンウイークは十日ほど滞在する。

今年の大湊、桜の開花が異常に遅く、伝統の下北駅伝も堅い蕾の下で行われた。水源地の満開の桜を見たいと思い、滞在を伸ばし半月以上大湊にいた。

時間がタップリあったので、川守の実家に預けっぱなしにしていた荷物を整理した。昔の木製のリンゴ箱が数個。ホコリだらけでかび臭い中身を開け、広げてみた。小学校の時の図画や習字の作品、中学の時の日記帳、総監部に勤め始めた頃の職員名簿、青年団活動に熱中した二〇代後半の頃の沢山の書類や資料・・・少年時代から上京するまでの間の色々な物が出てきた。五十年振りの再会である。

その中にB四判で茶色に変色しボロボロになったガリ版刷り十頁の台本と、モノクロ写真が出てきた。台本には『悲劇マクベス』(全三幕)と記してある。

昭和二十四年秋、大湊中二年生の時の学芸会で、わが三組が校内最優秀賞を得て、十一月三日に大湊劇場で開催の小・中学校合同の学芸発表会で演じた。

写真は、終演後のステージに全出演者と恩師が並び今は無い初盛写真館が写してくれたもの。

主役マクベスを演じた筆者が中央に写り、隣にマクベス夫人役の小林まさ子さん、ダンカン王の村井悌蔵君が写っている。

出演の二十四人、みな十四歳の純情可憐な名優たちである。以来、六十四年の歳月が流れた。

マクベス夫人をはじめ、早川、吉田、菊池、弥栄さんなど他界した人が五人、病気で動けなくなった人が四人、住所不明で連絡のつかない人が三人・・・時の流れは実に冷酷である。

最後列に先生方六人が写っている。左から美術の佐々木清栄、担任の工藤茂信、演出の関寿雄、音楽の三上公一の四先生は他界され、その右の藤島晋六、林昭夫先生は今もお元気と聞く。

敗戦からわずか四年、極端な物資不足の時代、衣装も小道具もみな手作りであった。

魔女三人登場の開幕冒頭に使われたベートーベンの五番『運命』、私がこの世でクラシック音楽に接した最初の曲である。

去年九月、大湊で二年振りに開催された同期会では、二年の間に十一名の仲間が亡くなっていた。なぜか全員男性。同期六クラス二百五十余名の二割以上の仲間が幽明境を異にした。

気持ちは元気でも、膝が痛み耳が遠くなり、物忘れ激しく、確実に老いが迫ってくる。

同窓会の総会や同期会などに顔を出せるうちは「幸せ」と思わなければならないと自戒。

今年の東京同窓会総会の六月二十九日が満七十八歳の誕生日。あと二年で八十歳になる。

(25・5・22記)

《春の遠足》横浜・三溪園

斎藤忠志(第9期)

四月六日(土)に「春の遠足・三溪園」を実施した。

この日は二、三日前から雨風が強いので外出は避けるようにとテレビは注意を促していた。こうした報道は珍しい。よほどひどい台風到来のような日になるのかと心配していた。延期か中止か迷っているうちに当日になり、朝、外を見ると風はなくやや薄日さえ差していた。

参加者は十六名、この中には名古屋から馳せ参じた佐々木朝彦さんや、青森県高窓連事務局長の佐々木和男さん(青森北高卒)がいた。

三溪園は生糸貿易商・原三溪によって、横浜東南部の本牧に一九〇六(明治三十九)年に公開された名園である。一七万五千平米の園内に京都、鎌倉から移設された歴史的に価値の高い建造物が巧みに配置されている。(重要文化財十棟、横浜市指定有形文化財三棟)

大高東京同窓会では、例年は三月下旬に花見の会を企画していたが、今年は諸般の事情で、時期がやや遅れたので「春の遠足」と銘打った。だが「しだれ桜」はちょうど満開だった。

三溪記念館を振り出しに各自一時間半ほど園内を散策し臨春閣、旧燈明寺三重塔、旧篁原(やのはら)家住居等を見て回った。この間にお茶を点てた優雅な御仁も数人いたようだ。

そして園内の一角、池のほとりで宴を開いた。尾身せつ子(旧姓祐川)さんは前夜精魂込めてつくった各種の郷土料理を持参してくれた。ビール、ワイン、日本酒、ウィスキー等を飲みながら昔の話などで盛り上がった。

結局、雨にも風にも影響されず、雨が降ってきたのは帰宅後だった。

なお園内を撮影した佐々木彦蔵顧問の写真が優秀ということで「『旅まぐ』写真館」に掲載されるというおまけまでついた。

2013.4.6

神奈川県　横浜　三溪園

「青森県立大湊高校の東京同窓会で、毎年春に「花見」をしております。これまでに、水戸偕楽園・隅田川・川越喜多院など巡ってきましたが、今年は横浜の名園「三溪園」でした。思いのほか今年の桜は早くすでに散っていましたが、さすが園内は随所に見どころがあって、参加した皆さん十分に楽しめました。」

佐々木 彦蔵

4月18日付「旅まぐ」より転載

第11回 あしざき海外旅行会

畑中皓二(第5期)

今回はドイツ・オーストリア・クロアチア・スロベニア・ボスニアヘルツェゴビナ・モンテネグロの六カ国を周遊してきました。企画はあしざき会(大高五期)中心で行い、総勢13名の参加で4月23日から5月2日までの10日間の日程で実行しました。

1日だけ少し雨があった位でほぼ全日程快晴でした。訪問国旧ユーゴスラビアは民族や宗教の諍いで混乱が続いていましたが、今は平和を保って居るようです。ただ観光地の中に砲弾・銃弾の跡が生々しく残って居る壁なども随所に存在していました、平和がいかに大事かを再確認しました。

来年はロシアかグランドキャニオンを考えて居ります。興味のある方は一報下さい。

あしざき会東京事務局
TEL&FAX
03－3406－1137

オーストリア・ザルツブルグ
モーツアルトの生家前

同期会便り

新緑の中気持も若く「安堵会」

富澤千里(第16期)

五月二十六日、東京渋谷の青山学院のキャンパスにある「青学会館アイビー・ホール」で、今年も同期生の集まり「安堵会」を開きました。出席者は昨年を上回る二十二名で、会は大いに盛り上がりました。遠く浜松、土浦から駆け付けてくれた同期生、「この日を楽しみに入院手術を乗り越えてきた」車椅子の同期生もおりました。

これからは「きょうよう」が大切だ、つまり朝起きて、今日する用事があることが若さと元気の秘訣だとのスピーチには頷かされました。そして再開を約して別れた後になって、みんなで写真を撮るのを忘れたことにやっと気づきました。

また、震災のため一年遅れで昨年九月八日、むつ市「はねやホテル」で、数学の藤井民之佑先生に遠路秋田からご出席いただいた『同期生の集い』には首都圏から九名が出席しました。

■東京同窓会この一年

24年7月21日
理事会・「都田川」総会総括・会計報告・会議費交通費規定・会員名簿整備・次年度総会日程

24年7月28日
納涼会「うおや一丁・銀座本店」役員・有志10名参加

24年10月7日
高総連バーベキュー大会国立昭和記念公園役員・有志11名参加

24年10月27・28日
第2回むつ市首都圏PR事業「むつとの遭遇」支援多数参加

24年12月7日
忘年会・高輪「喜久寿司」役員・有志14名参加

25年1月20日
役員・有志新年会千葉県浦安市・大江戸温泉物語「浦安万華卿」温泉を堪能した後、懇親会という初の試み・16名参加

25年2月22日
執行部会(事務局会議)品川「ななかまど」理事会・総会の日程確認「春の遠足」等内合わせ

25年4月6日
春の遠足　横浜・三溪園16名参加(上記記事参照)

25年4月13日
理事会・「シーボニア」総会までの日程及び準備事項確認

25年5月11日
理事会・「都田川」総会案内発送

25年5月25・26日
第3回むつ市首都圏PR事業「むつとの遭遇」支援

25年6月8日
理事会・総会仔細確認当日の役割分担等納涼会の企画

25年6月29日
25年度定期総会新卒者激励会・懇親会機関紙「なかま」33号発行

東京へ下北を贈ろう!
なまこ・ほたて・菜の花商品・海産物全般
有限会社 すぎやま
青森・下北ふるさとの会
青森県上北郡横浜町字大豆田127
TEL0175-78-2080・FAX0175-78-6051
URL：http://tpsun.jp
E-Mail：info@tpsun.jp
My E-Mail：sugiyama@tpsun.jp
代表 杉山 徹　第22期生(同窓会長)
Travel Plaza SUN・SHINE
Aomori-Pref Yokohama
本州のテッペン下北半島

「東京生活」アンケート No.28

今年三月、われらが母校青森県立大湊高等学校を卒業し、進学・就職のため上京した同窓会新会員第六十五期生の皆さんに、初めての東京生活についてのあれこれを尋ねてみました。

（返信到着順）

《質問事項》
①東京（首都圏）で生活してみて一番ビックリしたことは何ですか？ ②言葉の問題で悩むことはありましたか？ ③上京後、クラスメートに何回会いましたか？ ④毎日の仕事（又は学校）は、きついですか？ ⑤今の仕事（又は学校）をかわりたいと思ったことがありますか？ ⑥田舎に帰りたいと思ったことがありますか？ ⑦大湊高校時代で一番印象に残っていることは何ですか？ ⑧母校の後輩に言いたいことは？ ⑨いま一番会いたい人は？ ⑩その他、どんなことでも・・・。

■匿名希望　（東京都文京区）
［□□□□専門学校］
①とにかく交通機関が便利なこと。②意外とすぐに慣れました。③4回。④楽しいです。⑤全くないです。⑥結構あります。⑦友達とすごした毎日！と行事です。⑧めんどくさいと思うこともいっぱいあると思うけど、高校時代は一生の宝物です。思いきり楽しんで思い出作って下さい。⑨クラスのみんな！

■松本恵実　（東京都調布市）
［エコール辻東京］
①暑いこと、人が多いこと。電車の人身事故が多いこと。②特になし。③5回くらい。④勉強はむずかしいけど楽しい。⑤なし。⑥なし。⑦大高祭（3年の）⑧自分の夢のために頑張って下さい。⑨高校の友達。⑩特になし。

■倉本文治　（神奈川県秦野市）
［東海大学］
①電車とバスの本数がむっと比べてとても多い。②特にありませんでした。③まだ会っていません。④今は少し慣れて楽しいです。⑤少しだけ。⑥あります。⑦3年生の時の大高祭で皆でとても良い思い出ができました。⑧これから同窓会でお世話になります。よろしくお願いします。⑨友人です。⑩大学の講義は90分で高校の頃より倍長いのになぜかそこまで長いと感じない。不思議です（笑）。

■今井優香（神奈川県小田原市）
［湘南平塚看護専門学校］
①みんな歩くスピードが速いかんじがする。②すぐに言葉に慣れた。③1回。④忙しい。⑤ない。⑥最初はさみしくて帰りたかったけど慣れると帰りたくない。⑦大高祭。⑧進学して友達増やせたら絶対楽しいと思う。⑨愛犬と高校時代の友達。⑩都会は楽しいです。

■山本詩乃　（□□□□□）
［神田外語大学］
①水がまずい。②ない。③たーっくさん。④はい。⑤ありません。⑥はい。⑦文化祭。⑧Ｂｅ ｐｏｓｉｔｉｖｅ⑨クラスのみんな。

■西谷友葉　（東京都多摩市）
［都立南多摩看護専門学校］
①ゴミの分別。③一回。④そうでもないです。⑤あります。⑥あります。⑦朝がつらかったなと思います。⑨お母さん。

■原　瑞稀　（東京都日野市）
［実践女子大学］
①空がきたない。水がまずい。緑が多かった。②標準語だと思っていたのが方言だったりすること。③一回も会っていない。④そのようなことはない。⑤ない。⑥ある。⑦部活の仲間と共にいた時間。⑧後悔のないように楽しめ。⑨祖母、部活の仲間。⑩特になし。

■佐々木ゆめ　（東京都台東区）
［東京造形大学］
①電車来るの早い。人身事故多い。②ありません。③会ってないです。④きつくないです。⑤思ってません。⑥あります。⑦部活動。⑧パソコンは持っていて損はないよ。⑨友達、後輩。⑩なし。

■津田俊博　（千葉県東金市）
［千葉県警察学校］
①色々な人がいること。②アクセントが違うとよく言われる。③なし。④かなりきつい。最近ちょっとなれた。⑤なし。⑥なし。⑦日々の生活。⑧あいさつの励行、言葉遣いの確認をすること。⑨中、高のクラスメート。⑩毎日元気にやっているがちょっとした事でクビを切られるから不安。

大湊の祭りあれこれ⑤

立花善裕（第19期）

この稿も五回目となったが、今回は前回の訂正から。

現在の大平町の「神明峯」は畑中旅館の「天女丸」を譲り受けたものと書いたが、畑中旅館では同じ年に「天女丸」と「天龍丸」というのと二台出したことがあり、大平町が譲り受けたのはその「天龍丸」の方である、と大平町内会の人から教えていただいた。

（右＝天龍丸、左＝手前が天龍丸、奥が天女丸）

さて今回のテーマはお囃子であるが、①山車の中で奏される「乗り子囃子」と②山車の曳き手によって唄われる通常「木遣り」と呼ばれているものがある。

乗り子囃子は「本囃子（祈祷とも呼ばれる）」「もどしこ」「酒盛り」の3種類。

本囃子は神社の前、昼間の運行時、その年初めて通る所で奏される囃子で、別当様が神社で祈祷する際に叩く太鼓の様な導入部があり、その後、少しづつ変容する一番から十番の旋律を繰り返し奏する。但し三番から四番、七番から八番への入り方は少し違うし、これから出航という時は、コーダ付き十番というか、十番のバリエーションの後「帆（はん）用意…云々」というのがあるが、委細は省く。31号で写真を提供して頂いたブログ「のほほん　お散歩日記」に、〝上町・大神丸の囃子は十一番まで〟とあったが、この十番バリエーションのことだろうか。

本囃子は神聖なもので、乗り子は袴姿で、山車の胴幕は下ろしたままで演奏する。外から胴幕を上げて中を覗いてはいけないことになっている。

次に「もどしこ」であるが、方向転換の囃子である。山車が出来た頃、安渡は一本道で、方向転換即ち戻ることであった。それが名前の由来ではないかと思うが、それを裏付ける資料はない。

外の木遣りの「とーれとーれ、横にせ」の声を合図に、基本的には四つのフレーズの繰り返しだが、仮にA・B・C・Dとするとと A・B・Dにはバリエーションがあり、太鼓の声の掛け方によって入り方が違ったりと、細かい約束事がある。

この「もどしこ」とほぼ同じ囃子を、下風呂の「若宮丸」で使っている。どの場面で奏するのかは不明だが、どういう関連があるのだろうか。

最後に「酒盛り」であるが、名前の通り賑やかな囃子で、山車は夜の装いで全部の「額」に明かりが入り、幕は上げっぱなしにし、乗り子も袢纏姿となり、酒盛りであるからまずはカンパイ、その後カネがシャカシャカ、シャカシャカ、太鼓がトントン、トントン、最後に笛がーという順序ではじまる。3パート構成で、短いイントロがあり、その後は3パートを繰り返す。

大湊小学校発行の「各科郷土教育資料」に筒井哲先生採譜の浜町・稲荷丸のお囃子（本囃子ともどしこ）の五線譜が載っていて、「上町、下町に於て多少の異動はある。即ち、下町の旋律は上町のそれに比較して稍々粗野の感あり」とある。確かに両者を比べれば、基本的には同じお囃子なのだが、大神丸の囃子はとても優雅で、「多少の異動」どころか、全く違う旋律に聞こえる個所もあり、同じお囃子とは思えない程違っている。そうなのになのか、そうだからこそなのか、これだけ違っているのに両者が長い間共存してきたことが不思議でもある。この違いはどこから来たのだろう。

賑やかで華やかな囃子であるが、最終日の「酒盛り」は乗り子からすれば悲しくもある。これが終われば祭りも終わり、また一年待つためのお囃子でもある。夜の運行も終わり、会所に帰り、全部の「額」の明かりが消されても、お囃子だけは暫く続いている…。おそらくどこの町内でもこんな光景が見られるのではないだろうか。

（続く）

編集後記

■六年目の「なかま」の編集。東京同窓会の催事があらかた「やまびこ」に載ってしまい、記事不足に喘ぎながらの作業でした。

■遠くの空からあらためて故郷を見直すような記事を毎号載せたいと思い、大湊新町・小松野を考えたのですが、準備不足で今回は載せられませんでした。

■「こんな企画をやりたいから役員にしてくれ」自薦他薦・年齢・性別問わず、こういう熱い人いませんか。

発行　青森県立大湊高等学校 東京同窓会
編集　立花善裕（19期）
題字デザイン　畑中皓二（5期）
事務局　〒三四三―〇〇三一 埼玉県越谷市大里 四〇―一―四四一
局長　富澤千里（16期）TEL〇四八（九七六）五一九二
印刷　N's Digital Factory